

# 小中学生の読書活動と言語力を育てるメディア

井上 豊久  
福岡教育大学教授

こんにちは。では早速発表させていただきます。

研究報告資料という、少し厚めの資料をおあげいただけますでしょうか。

最初に調査研究の概要というところで、今日の私と立田先生の発表は実態調査の発表が中心になると思われるのですが、研究の成果としては、『読書教育への招待』という本でもまとめられています。この中に、実態調査のほかに、今日も御発表いただきましたが、実践の場のプログラムといたしまして、そういった研究とか、あるいは読書とか言語力に関する交流というものも含めて、総合的に研究をさせていただきました。

研究分担者としては、国立教育政策研究所の方と一緒に、10何名の研究所以外の研究分担者も御一緒させていただきました。その1人が私でございます。

今日私が発表させていただく部分は、全体研究の中では一部分ということなのですが、先ほど御紹介ありましたが、私が分担した部分だけではなくて、ほかの分担者が研究、執筆した部分も含めて発表させていただければと思っております。

それでは、1ページの調査研究の概要というのをご覧ください。

先ほど徳永所長からもお話いただきましたが、このプロジェクトは平成19年度から21年度にかけて3年間の実施でございます。研究課題は「言語力の向上をめざす生涯にわたる読書教育に関する調査研究」ということで、幅広く、後で少し御説明しますが、学校だけではなくて、家庭とか地域、あるいはもう少し広いメディア環境なども含めてということもございます。それから年代的といたしまして、そちらの方も生涯にわたるといってささせていただきます。

児童生徒の読書活動を推進する教育環境の整備ということなのですが、こちらは、当然、文部科学省がずっと言っております地域からの教育ということとも関連しております。そちらのほうからこういったテーマで、先ほど御紹介ありましたが、読書が少ない、あるいは映像メディア、テレビとかゲームの時間が長いといった状況も踏まえて、今の時代の中でもこういった研究を御一緒させていただきました。

読書活動の推進によって、一つの言語力という言葉を使わせていただいているのですが、言語力という言葉が、もちろん言語に関する様々な、国語の中での能力というだけではなくて、関心とか、意欲とか、そういったところも含めて言語力ということで我々は解釈して、研究を進めさせていただいております。



先ほど申し上げましたように、本研究では、家庭、学校、地域における様々なプログラムの充実とか、あるいは環境の整備、そういったことにできるだけお役立ていただく基本的な基礎データといえましょうか、そういったものの把握に努めさせていただきました。もちろん基本的には全国のデータということでございます。

具体的には、1ページの下の方に書いてありますが、小学生調査というのを平成20年の1月から3月、小学6年生を対象として、有効回答数は1,500件あまりです。中学生調査がその次の年です。中学2年生ですが、1,700件。それから、21年の7月から社会人調査と大学生調査も含めて、こちらはネットでお答えいただいております。そういった中で、前半の小中学生の方を井上が、社会人調査を立田先生が担当しました。

2ページをお開きください。

小学生の読書活動と言語力、これは中学生もかなり重なっております。多少違ったりしている部分はあるのですが、重なっておりますので、同じようなところは少し省略させていただきます。

言語力の問題ということですが、先ほど言いましたように、言語力というのは、関心とか意欲とか、そのほかのところも含めてということなのですが、特に今回は読解力というので少し調べさせていただきました。

読解力というところは、もちろん例えば漢字の能力とか、いろいろ言語に関する部分はあるのですが、やはり読み解いていく、PISAという調査によりますと、自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発展させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、実行する能力、応用的な力も含まれているということではないかと思えます。

2ページの上にありますように、三つの読解力ということで、具体的な問

題自体は後ろに小学生のものがついています。32～33 ページに読解力の具体的な実施させていただきました問題を入れさせていただきます。

一応、情報の取り出しというところと、解釈と、熟考・評価という三つの点で読解力調査をさせていただきます。全体としては、吉岡先生のほうが少し分析を出されているのですが、やはり読解力に影響を及ぼすのは逆の順番といましようか、熟考・評価、それから解釈、情報の取り出しという、やはり熟考・評価というのが全体の得点化された読解力には影響を及ぼすということでした。この辺はまたいろいろ申し上げたいと思います。

読解力得点の分布ということで、2 番の中で総合点を足しまして、こういった形にしております。

では、読解力、当然、読書活動ということで関係性を見させていただいているのですが、2 ページの下にありますように、小学6年生なのですが、最近1カ月でどういう状況だったかということを示させていただきます。本も読書も読まなかったというのは非常に少ない割合でございます。それから、マンガや雑誌は読んだが本は読まないというのは16.8%です。2割まではいかないということでございます。本は読んだがマンガは読んでいないのが10.5%、本もマンガも読んだのが61.9%。6割ぐらいは両方読んでいる。1カ月以内ということですので、こういった状況でございます。

次のページをあけていただきますと、先ほど申し上げました読解力、これはペーパー試験ですが、それとの平均値を出してみたものでございます。やはりデータ的にはこういった傾向になりました。本もマンガも雑誌も全く読まなかった子は、平均値としては最も低い。マンガや雑誌は読んだが本は1冊も読まなかったというのがその次で、それから、本は1冊以上読んだがマンガや雑誌は全く読んでいないというのが最も高いという数字でございます。本も1冊以上、マンガも雑誌も両方読んでいる子は低くはないといった結果です。

それから、読書冊数ということなのですが、これも中学生も似たような傾向があるのですが、先ほど五十嵐先生もおっしゃいましたが、本をたくさん読む子が読解力が高かった。しかしながら、中学生も一緒ですが、これは実は後で出ますが、テレビなどもそうですが、本漬けになりすぎている、そういった子どもはやはり人数は少ないですが、20冊以上の子どもは必ずしも読解力が高くないという結果が出ております。

同じように時間に関しても、30分ぐらいでも読んだ方が高いのですが、30分から1～2時間が高い形です。3時間以上がちょっと厳しいようでございます。

それから、蔵書数なのですが、これも中学校の方はそう多くなくても差は出ないという感じもあります。小学校の場合はきれいに、4ページの上を見ていただきますと、家庭の中で蔵書冊数が多いと読解力得点の平均値も高くなるということでした。

それから、目的。実は後で申し上げますが、読書とか読解力に関しても、量とか内容もあるのですが、目的といったところが影響が大きいということがあります。特に読解力得点の高いのはどういった目的で読んでいるかということ、いろいろな人の考えに触れたい、空想したり夢を持つため、調べ学習のため、そういったどちらかということ積極的というか、主体的と言えます。逆に言えば押しつけてはないところが一つあるのかなというのがございました。

5ページをお開きください。

これもまだ解釈の途中ではあるのですが、本の中に線を引くというのはやっぱり高くなっていますが、これも本に線を引いていいのかということもあるのかもしれないところです。それから、同じ作者とか、感想文を書いたりとか、発展的にさせている子どもの方が、傾向としてはやはり高い数字です。下から4番目が、特に何もしたことがない。これが基本になると。その上の方、発展させたり継続させていくと、やはり読解力も高くなるのではないかなと。

それから、下の読書をめぐる経験というところでは、ほとんどやはり読書をめぐる経験というのはプラスに働いている傾向がございました。特に全くないとかあまりないとかに比べると、よくあるというところがやはり平均値が高くなっている。例えば小さいときに読み聞かせをしてもらった、地域の図書館で本を借りる、そういったところ。学校の図書館で調べ物をするとか、学校の図書館で本を借りるというところは、「全くない」に比べると「よくある」の方が高いのですが、「あまりない」に比べると、「よくある」というのは、先ほどのどういった形で子どもたちが主体的にしているのかなということと関係があるのかもしれない。でもまだ、こちらの研究の結果としてはこういった感じです。

6ページからが中学生でございます。

中学生も大体同じような傾向でございます。

こちらの方も、割合としては6割ぐらいが本もマンガも読んでいるということでございます。本もマンガも読まなかったのと、マンガや雑誌は読んだが本は読まなかったのも含めて2割を超えている状況です。

読書の状況と読解力、これは非読書群とマンガ群が低い。やっぱり非読書群というのは非常に低いということになっております。

次の7ページでございます。

こちらでも少し色がついておりますので見やすいと思いますが、成績グループを下位群、中下位群、中上位群、上位群という4段階に分けました。一番下に割合が書いてあります。かなり機械的といいますか、4分類になるように分けさせていただいているのですが、その中でも、こういった読書をする、しないによって違いが非常に明確に出てくる。結果的には、やはり本を読んでいない子どもたちは下位群にいる。読書もマンガも読んでいる子どもは中から上位群にいるということで、本がやはり成績に関係している可能性があるかと。

7ページの下は、これも先ほどの小学生も一緒なのですが、やはり基本的には読書冊数が多いほど読解力が高いということなのですが、20冊以上になると人数は少ないのですけれども。

それから8ページにまいりまして、家庭の蔵書冊数と読解力です。こちらでも蔵書冊数が大体多いくらいがよいですが、かといって多ければ多いほどぐっと伸びてくるわけでもないという状況で、一つ言えることは、やっぱり全く家庭に本がないということは、やはり接する機会がかなり限定的になるのではないかなと。やはり家庭に本がある環境というのが読解力にも影響を及ぼすということです。

読書の目的、これも先ほどの小学生と大体似たような傾向なのですが、やはり主体的といいましょうか、積極的にとか、あるいは感動したいとか、そういう本の素晴らしさみたいなもの、ロマンといいましょうか、そうするとやはり読解力も高くなるのかなと思います。

それから、次の9ページ。

これは先ほども、本の中に線を引いたりしてしっかり読み込むとか、そういったことです。あとは続きを想像とか、同じ作者の本、継続、発展していくような読書後の行動につながる場合が、読解力得点が平均としては高くなるのではないかなと思います。

下の、これも小学生と大体同じなのですが、読書をめぐる経験というのは、やはり読み聞かせとか地域の図書館、そういったところがやはり高くなっています。

10ページです。

よく読む本の内容別にちょっと見た傾向でいえば、やっぱり読解力に関しては、学習に使う本というのが高い、ファンタジーや推理小説もそうです。特に注目されるのが、下の絵本、これはちょっと解釈があれですが、ゲーム攻略本というのがありますが、ここは低くなるといった部分が出ておりました。

それから、言語力を育てるメディアということで、文字活字の本だけではなく、

いろいろなメディアに関して質問項目の中で質問させていただいております。

どういったメディアかというのは、マンガの場合、短い方が比較的いいのかなというのがありますが、特に問題なのが3時間以上です。後で全体的なことも申しますが、新聞と勉強以外は、あまりにも長時間になると、読解力に関してはマイナスになるといった傾向がございました。新聞と勉強以外は、あまりにも長時間になるとマイナスになる。ただし、テレビ・ビデオも大体同じ傾向だと思いますが、11ページをちょっと開けていただくと、テレビゲームと電話は、図23と26です。傾向としては、こちらは短ければ短い方がいいというのが一般的です。図22とか24とかを見ていただくと、マンガとかメールとかテレビなどは、ある程度短い間でしたら悪くはない。長時間になると課題といましょうか、結果的には読解力の平均値が低いという状況でございました。

ついでに申し上げますと、分析の中でしていただいているのですが、勉強とクラブ活動は、全くしない場合には少し平均点が低くなるといったところがあります。

13ページをちょっと開けていただけますか。

これを表にしたのが13ページの上の表でございます。こういった形で、ある程度明確に数字として、読解力としてはこういう結果が出ているということでございます。

先ほどの話で言えば、読解力に関しては、もちろん読書体験というのはかなり大事だと。例えば読書量とか、先ほどの家庭の蔵書数などもあるのですが、やっぱり読書体験というのは大事だということがあるのですが、その中でも、やっぱり理由とか目的とか、そういったものがかなり大事になってくるのではないかなというところですよ。

そうした中で、ちょっと総合的に、13ページから申し上げますと、メディア接触の問題性といましょうか、先ほど五十嵐先生も、世界一、映像メディアに接触時間が長いとおっしゃいましたが、いろいろな生活の中で、子どもの総合的な生活、あるいは文化ということをつまえていく場合に、やはり読書と周りのもの、特にいろいろなメディア、メディアというのはメディウム、媒介という意味です。それから絵ももちろん、本もメディアです。そういったものも含め、最終的にはすべてケータイに集約されるのではないかと。ケータイは何でもできますね、ゲームでもテレビでも何でもできると言われている、そういうものすべて含めてメディアということです。そうした様々なメディアの中でも、やはり読解力とかいろいろなところにもそれぞれが影響を与えてくる。13ページの上の状況と似て

いるような状況がございます。

そうした中でも、14 ページ 2 段落目の、本や新聞以外のメディアの中でと書いてあります。今、脳が発達するとかテレビなどでも言われているのですが、やはり実態調査の中からは、ゲームというものに少し課題があるのかなと。例えば学校で飼育をしたことがありますかと聞いても、これは同じ学校でアンケート調査をしているわけなのですが、全くないと回答している子どもたちの割合が高くなる傾向があったりします。これは解釈はよくわからないのですが、意識が低いとか、関心がないとか、これはまだ研究の途中だと思えますけれども、そういった状況もあるのかなと。

コミック、マンガの部分は、研究会の中でも出たのですが、全体的には、資料の中ではマイナス要因というか、コミックに関しても課題がある部分もありましたけれども、ただ、ちょっと出ていますように、コミック、マンガを見て直接体験をしようとか読書に向かおうという子どもたちもいます。内容にもよる部分もあるのかもしれませんが、やはり両方に向かう部分はあるのかなというのはございました。しかし、全体傾向として、特にマンガ漬けとかコミック漬けの子どもに関しては注意が必要かなと。

それから、2) でございますが、メディア接触の問題性、この辺のところはあとで読んでいただければと思えますけれども、国語の力というか、読書の中で聞いたり想像したりつくり上げていく中で、メディアを構成するといった力もあるのではないかなということの一つ申し上げたいと思います。

15 ページに入りますが、先ほど言いましたように、世界の中でも電子映像、テレビ、ゲーム、ケータイとかを長時間、そのある意味では対極に、外遊びも多分あるとは思いますが、やはり文字、活字の文化と重なり合う部分もありますが、やはり時間的には明確に、やはりゲームやテレビの総時間が長いと、どうしても読書時間は短くなる傾向がございますので、総接触時間というのを考えますと、やはり少し考えていく時期に来ているのではないかなというのがございます。

ただ、2 段落目に書いていますが、子どもの実態とか、家族のあり方とか、いろいろ二極化している状況とか、あるいは生活を含めて様々な家庭環境、あるいは学校環境、地域の環境もございますのでそう簡単にはいかないのですが、ただ、今、ブックスタートというのをされているところが多いと思いますが、ブックスタートも含めて、子どもの生活の中で、いろいろこういった課題みたいなものを提示していくことが必要なのかなと。

それから、ゲームのところの問題性は、地域の中でも少し考える必要があるよ

うでございます。

ちょうど時間になりました。あとはまたパネラーの時間がありますので、先ほど申し上げましたが、やはり読書というのは非常に読解力に影響を与えます。ただし、もちろん量とか質の問題もありますが、きっかけとか理由とか、さまざまな読書との要因が関わりながら読解力に好影響を与えているということを申し上げて、前半の報告を終わらせていただきたいと思います。